

杏子

有馬頼義

文藝春秋刊



子の査巡

昭和四十三年十月二十五日 第一刷

定価 五六〇円

著者 有馬 頼義

発行者 上林 吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話(二六五) 一一一一番

郵便番号一〇二

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本
製函 小野部製函

万一乱丁落丁の場合はお取換致します

巡査の子

表
三
井
永

大川端

大正末年頃。

市電の山谷停留所から大川へ向かって一本の、かなり広い道が、まっすぐにのびていた。道の両側には、こまこました家が並んでいて、店屋と、しもた家が、雑然となり合っている。その道は、大川の少し手前で、丁字路になった。東へ行けば、白鬚橋のたもとへ出る。右へ行くと、言問橋のたもとで、再び電車通りと一緒にになった。

大川と並行に走っているその道と、川との間に、西国筋の大名で、明治になってから子爵になった松浦彦三郎の邸があった。敷地は、一万坪近くあり、大川にそって横長にひろい。その建物は、江戸時代に建てられたもので、明治

になってから、一度修理を加えただけであった。建坪は、平家、一部分二階建てで、約二百八十坪あった。付属の建物を計算に入れると、四百坪位になったかも知れない。

山谷の停留所から、まっすぐき当たったところに、松浦家の表門があった。江戸時代、ここは、松浦家の下屋敷であった。上屋敷は三田にある薩摩屋敷のとなりで、これは、維新のとき、政府にとりあげられた。そのほかに、松浦家には、日本橋に、中屋敷があった。その頃の習慣でいうと、上屋敷は、藩の公邸であり、政治向きのことは、すべてそこで行なわれた。日本橋の中屋敷は、主^{あるじ}の居城であった。利用度からいえば、しかし中屋敷は、あまり重要ではない。そして、下屋敷は、別荘のようなものであった。家族は原則として中屋敷に住んだが、中屋敷もとりあげられると、下屋敷へ移った。そこだけが、明治になってから、落地召上げのかわりに、三十万円の世襲財産といっしょに、松浦彦三郎の所有になった。世襲財産というのは、華族の体面を保つために与えられたものであったが、それは銀行に凍結された。その利子と、三十万円に対する保証による借金で、松浦家の財政がまかなわれた。

不思議なことに、大正十二年の関東大震災で、東京は全

滅したが、この邸のある一画だけは、延焼をまぬがれた。

そこだけが湿った土地であり、目に見えない空気の壁のようなのがあつて、火をふせいだかのように見えた。ずっと後のことになるが、東京が再び、空襲によって廃墟になつたときも、同じことが起こつた。その辺だけが無事であつた。

人々は、松浦家の表門に、まず感心した。下屋敷が、一番土地がひろいので、建物は、充分余裕があつた。建物としては、上屋敷よりも、中屋敷よりも立派であつた。黒塗りの門は、門というよりも、それ自体が一つの建物であつた。頑丈な扉には、大きな乳鋸が打つてあつた。両袖に、くぐりがついていて、屋根には、瓦がふいてあつた。

門には、充分な厚みがあつた。屋根がある程だから、九尺はあつただろう。したがつて、門の両側につらなる塀はただの塀ではなくて、門番や、小使い達の住居であつた。即ち、その住居の窓は、往來に向かつてひらいている。だからそれは、外から見れば、単なる黒板塀であるが、中から見れば、家なのであつた。道と、塀との間には、はば三尺程の溝があり、水が流れていた。屋敷がつくられたときに、掘られたものであつた。その水が、何処からきて、何

処へ流れてゆくのかは、つまびらかではない。松浦家に、徳川家からとついだ女がいたから、そういう建物と格式が残つていたのかも知れない。しかしそれは昔のことである。

当主の松浦彦三郎は、徳川家康につかえた初代からかぞえて、十四代目であつた。大名華族の多くは、利殖生活を續けて、何かの名誉職に名前をつらねて暮らす人が多かつたが、彦三郎の父の彦一郎は、先見の明があつた。財産家の古い実業家の家と縁を結び、また自らも働くことによつて産をおこした。子の彦三郎が、政界入りをし、その上財界と密接な關係を持つようになったのは、先代のもくろみが成功したためであつた。彦三郎自身にも、それだけの才能があつたのだろうが、大正期にはいると、彦三郎は、保守政黨の領袖となり、貴族院議員となり、羽振りをきかせた。したがつて、彦三郎の橋場の大川ぞいの家には、極めて大規模な生活がくりひろげられていた。川向こうに、大倉別邸があり、隅田川をはさんで、対立した。

黒門をはいると、やや右手に馬車まわしの小高い植込みがあり、それをまわつてゆくと、玄関があつた。式台のはばは、五間あつた。昔、駕籠が二つ位並んでつけられるように考えられたのかも知れない。式台をあがると、赤い

じゅうたんを敷いた一間はばの廊下が、まっすぐに、大川端へ向かつていた。川べりに、二階だての客間があった。上下四間の独立家屋である。夏になると、襖や障子が開かれるので、玄関に立った客の目に、大川を上り下りする舟の姿が見えることがあった。それは一種のもてなしのようなものであった。

客間に行く途中の両側に、幾つもの部屋があった。左側は、昔、次男以下の男子が住んだ。長男は名譽ある椅子を予約されて、特別扱いをうけたが、次男、三男は、冷や飯の部屋住みであった。大正の末期には、そこへ、二人の書生が住んだ。松浦彦三郎には、男の子は一人しかいなかった。忠彦という。

廊下の右側には、事務室があった。昔の藩の政治の小さくなった姿である。老人の家令は、昔の家老であって、その下に、家従、家扶という風な地位の男たちがいた。

家令は、主にかわって、松浦家の財政を管理運営し、その下に、総務とか、会計とか、庶務とかいう仕事を与えられた、少しばかり家令よりも若い男たちがいて、朝の九時から、夕方の五時まで、そこにつめていた。彼等は、言わば一つの会社の組織の一部分であり、サラリーマンであり、

儀式の伝習者でもあった。その事務室の手前を右にまがると、長廊下の果てに、厚い大きな杉の一枚戸があった。

一枚戸といっても、それはつまり二枚の杉戸のひき違いであって、正確にいえば、二枚戸であった。一枚ずつの戸は、黒いふちどりがしてあって、木の肌色の部分には、緑の色で、何やら簡単な彫りがあったが、忠彦は覚えていない。その杉戸は、物理的に、廊下を遮断しているだけではなかった。〈表〉に属する廊下は、じゅうたんで、杉戸の中は、畳廊下なのであった。その杉戸までが〈表〉であって、男たちは、たとえそれが家令であっても、そこまでしか行くことは出来ない。奥にいる女たちは、その杉戸から出てはならなかった。主の彦三郎は、午前中、外出しないときは、その事務室まで出てきて、家令の、政務についての報告をうけた。勿論、予算、決算も、そこで合議され、決定された。

杉戸の中は〈中奥〉と呼ばれた。江戸城のしくみにならったものであった。中奥には、土蔵のほか、仏間、奥向きの客の応接間、子供たちの居間、茶の間、その奥に台所などがある。

〈中奥〉と〈大奥〉の境は、はっきりしていない。廊下つづきであったが、棟は、別になっていた。大奥には、当主彦三郎と、妻の正子が住んでいた。主夫婦のために用意されていたのは三つの部屋と、二人だけの浴室と便所と、正子の化粧室と、寝室とは別に、庭に面した、彦三郎の特別な客を通す客間が一つあった。

彦一郎は、その一番奥の部屋で死んだ。松浦家で、ちゃんまげをつけたことのある最後の人であった。彦一郎が死ぬと、後室は、船橋の実家の別荘へひき移った。彦三郎も一人っ子であった。

正子は、美しかったが、病弱であった。表の男達は、殆んど正子にあうことはない。〈大奥〉では、年寄りの女中頭がおり、その下に、三人の若い女、台所を走りまわる小女と、中年の男の料理番がいた。台所は、松浦家全部の食事をまかなうから、広かった。台所だけで、二十坪はあった。

邸の中は、いつも静かであった。二十何人の人間が、そこに住んでいるようには思えなかった。

母屋のほかの部分、つまり黒門につながる独立家屋には、運転手の肥沼一家、門番の音松、自動車がきて失業し、小

使いになった弥造、先代の舟遊びにつかえた船頭の外次郎らが住んでいる。家令、家従、家扶たちは、敷地の隅に、長屋を持っており、そこに住んだ。料理人は、外から通っていた。

屋敷は、直接大川に面していた。東の半分には、低い生垣があったが、表の客間は、川の上のにり出すように建てられており、その西側に、水門があった。石段を、二、三段おりと、低い小さな扉があり、その外に、一間ほどの、板の舟着場があった。干潮の時には、石垣の根本まで水位がさがり、舟着場はやせたが、満潮になると、舟着場は水の下になり、石段の工程まで川の水がはいってきた。

さらに西へ移ると、そこは、ちょうど中奥の庭先で、コンクリートの低い手摺があって、庭と川を区別していた。その西に、亭が一つあった。昔、茶室に使っていたもののようであった。ふだんは雨戸をしめてあったが、例えば、大川で、ボート・レースが行なわれるようなときに、その亭は開かれ、掃除され、主の彦三郎や、正子や、忠彦を迎えた。

もっと東側には、和舟をやってある水の引入れ場があった。ここは外次郎の職場であったが、彦三郎の代にな

ってから、殆んど仕事がなかった。先代の時には、よくそこから舟を出して八百善へ食事をしに行った。舟はしかし、まだ新しかった。後に、忠彦の相手をして、外次郎は、よく舟をあやつるようになったのだが。

大川ぞいはいそういう配置で、あとの敷地の中には、畑や、温室や、物置小屋や、肥料小屋などがあった。そこでの仕事は弥造の責任であった。

男たちは、同じ邸に住む女たちと、話をする機会は殆んどない。その中で弥造だけは、庭を散歩している彦三郎や、正子に出会うことがあった。弥造はしかし口はきかず、頭の鉢巻をとって一礼するだけであった。主夫婦がその辺を歩いている時は、弥造は、小屋の中へかくれて煙草をすった。まだ自動車のない頃、弥造は若く、先代を人力車にのせて走りまわった。権田原の急坂を一気にのぼったというのが、弥造の自慢であった。

家令の名前は、田島宗忠といった。日露戦争に、連隊長として従軍し、顔に弾を受けて退役になった。ぶらぶらしていたのを、先代がひきとったのであった。田島宗忠の額には、いまでも弾のあとが残っている。小指の先なら充分にはいる位の深い穴であった。

事務室にいる男たちは、その姓を呼ばれたが、書生以下、女中達も含めて、奥の女中頭をのぞいては、原則として、姓は呼ばれない。無いのも同然であった。どういう意味があったのだろうか。

古い習慣が、まだ消えていない。奉公人の中に、主一家の者と同じ名前があると、忽ち改名させられた。勿論、戸籍上の改名ではない。呼び名を、新しくつけられるのであった。

この屋敷が、古いかげを残していることは、隅田川そのものの歴史であったかも知れない。先代彦一郎が住んでいた頃は、若者たちは、大川で泳いだ。対岸まで行って戻ってくる達者もいた。都鳥が遊あそべし、白魚が群をなして泳いでいたそうであった。明治の何年頃かに、白鬚橋の少し上流に、鐘ヶ淵紡績の工場が出来た。それから、年々、大川の水は、よごれてきたかのである。あげ潮のときは水面が波立ち、わからないが、潮が引きはじめると、いっときに水面に油が流れ、それは太陽のかげんで七色にひかった。

大川の一日は、朝から夕方まで、刻々とその景色を変じた。上り下りの沢山の舟は、それぞれに生活臭を持っている。

たが、大川という川の持つ雰囲気は、人間の社会とは無関係に、自然の変化を持っている。四季もあった。春には、大川の水は春らしいあたたかさを持っていたし、対岸の川岸には、桜並木があった。夏になると、浴衣がけで、手にうちわを持った人達が、まだ木造の古い橋の上に見られた。秋は寂しい。霧が川面を流れるのであった。雪が降ると、対岸は見えなくなり、舟の姿もおぼろになるが、いくら降っても、雪は、水の上にはつもらない。陸が雪にとざされると、大川の流れは黒く見えた。まわりが白いから、川の水が黒く見えるのか。

そんなとき、彦三郎は、めったに使ったことのない亭を開かせて、雪見をすることがあった。生活に疲れを覚える年齢に達した彦三郎にとって、それは、休息の時間であり、思索の時間であったのかも知れなかった。そんなとき、—— 忠彦は少しも興味を抱かなかったが、彦三郎は、妻の正子と、忠彦の姉の麻子を伴って、雪の大川を見ながら、茶をのんだりする。大正とは、そんな時代であったのだらう。

「忠彦の通学の時間が、かかりすぎるようでございます」と正子はいったりした。

「何時間かかるのだ？」

「山谷の停留所がこむのだそうで」と正子は麻子の方をふり向いて同意を求めた。

「工場へ通う人達と時間がぶつかるので、子供たちは、はねとばされて、三台も四台も、電車を待たなければならぬ」と申しております」

「で、学校まで、何時間かかるのか」と彦三郎は、今度は、麻子にきいた。

「三時間もよ、お父さま」

「三時間！」

と彦三郎は、びっくりした。

「今まで、ずっとそうなのか」

「はい。ですから、八時はじまりのときは、夜の明けないうちに家を出なければなりません」と正子はいった。

彦三郎は自動車で通っていた。

子供たちの通学について、父親である彦三郎が、何も知らなかったのは不思議だが、大人の生活と、子供の生活は、ひどくかけはなれていた。彦三郎には、彼自身の公的と私的の生活があり、子供の教育は、正子の責任であった。しかし、正子の責任といっても、正子自身が、常に子供たち

の日常に目をくばっていたわけではない。

家のしきたりや、家族の構成からいって、子供は、両親にやしなわれているのではなかった。家にやしなわれている。正子の義務は、あるじにつかえることであり、子供のことは従になった。病身でもあった。子供が、親にはなく、家に養われているという具体的ならわれば、子供の教育にかかる費用を、親が全く知らない、という風なものであった。

あるじの彦三郎は、勿論収入はあるが、それは、家とも、家族とも関係がなく、彦三郎自身の小遣いなのだ。そして家令を長とする会社組織のような「家」が家族の一人一人、また使用人の一人一人にかかる経費を予算として計上する。正子も、現金を、持っていないかった。

めんどろな話だが、たとえば正子が着物を新調する場合、その金は事務室の会計から支払われる。そしてその金額は、月々の正子の取り分から落とされるのだ。そういうように、麻子と忠彦の二人の子供に対しても、生まれた時から、家の経費とは別に、月々、きめられた月給のようなものが支出されていた。

しかしそれは子供である二人に現金のまま支給されるの

では勿論なく、二人の名義の銀行通帳に記載されてゆくのであった。そういう仕組みだから、自然、親が、子を育てるという風にはなつてゆかない。正子は、二人の子供のことを気にしてはいるが、実際は、家では、女中の誰かが、そして外では書生の下村と高木のどちらかが、めんどろをみることになった。

二人の子供の通学の無理については、だから、誰に責任があるというのでもなかった。

正子は、そのことを知っており、それを、あるじの彦三郎にいう責任があったかも知れないが、正子にしてみれば、学校は学習院にきめられているし、住むところは橋場にきめられているし、その二つのことが動かせない限り、通学に何時間かかって、仕方がないのであった。

麻子の女子学習院は、神宮にあり、忠彦の学習院初等科は、四谷であった。その二人のために、特に乗りものを用意するという習慣はない。したがって、忠彦の場合でいえば、山谷から市電で神田まで行き、神田から省線で四谷へ行く、という方法よりほかに手段はなかった。忠彦は、四時に起こされ、朝食をし、山谷で、三台も四台もの市電のりそこない、早くて二時間、混むと三時間もかかって学

校へ行かなければならなかった。

そのことが、彦三郎の耳にはいったのは偶然だが、彦三郎にしても、打つ手はなかった。学習院初等科では、皇族だけが、自動車の通学を許され、一般華族の子弟は、電車通学をするようにいわれていた。彦三郎は、もしかすると潔白すぎたともいえるだろうか。忠彦たちの仲間のある部分の子弟は、自宅から自動車で送られてきて、学校のずっと手前で車からおりて、歩いてくる者があった。正子が、ほかの母親たちのように、始終学校に顔を出していれば、そういう方法があることに、もっと早く気付いていたかも知れないが、学校の父兄会に出るのは、たいてい田島宗忠か、女中頭の竹であった。

そういう生活環境が、忠彦の成長に、どういう影響を与えたかということは、ずっと後に、忠彦が大人になってから、わかった。しかしとにかく、その当時の忠彦は、おとなしく、目上のいうことに忠実であり、そして少しばかり閉鎖的で、女性的な少年なのであった。

忠彦自身にとって、三時間の通学時間は、それほど苦痛ではなかった。時には姉の麻子と一緒にこともあり、一人きりのこともあった。電車の中では、大人たちは、親切で

あった。電車の窓から眺められる街のたたずまいも、結構楽しかったし、電車が一番前へ行くと、自分が運転手になったような気がして、面白かった。その路線は、所謂ボギー車であった。

忠彦が残念に思ったのは、学校のある四谷から、赤坂見附の方へ行く電車が四輪で、運転手が、客室の外の、ふきさらしの運転台で、大きなハンドルをまわしてブレーキをかけているのを見て、それに乗れないことであった。自動車には、あまり興味はなかった。その頃の東京には、千台位の外車しかなかったようである。舗装道路は、殆んどなかった。電車の軌道は石畳がきれいに並べられていたが、両側は、埃っぽい土で、砂利道もなかった。これは後に知ったことだが、三宅坂とか、アメリカ大使館の横の坂には、木製の三寸角位のものが、すべりどめに、道路に敷かれてかためられていた。

二人の通学のこと、彦三郎と正子の間でかわされてから数日後に、忠彦は、驚くべき事件にぶつかった。正しく、それは忠彦にとって、驚くべき事件なのであった。

授業を終わって、ランドセルを背中につけ、校門を出たときに、忠彦は、一人の男に声をかけられた。

「忠彦さま」と相手はいった。

それは、制服制帽をつけた、運転手の肥沼であった。忠彦は、びっくりした。

小学校の一年生のときは、書生に、送り迎えをしてもらった記憶があったが、それ以後はずっと一人の通学を続けてきたのだった。

肥沼は

「お父さまのおいいつけで、お迎えに参りました」といった。老人の運転手は、ずいぶん丁重であった。

「迎えて？」

「お車でございます」

小学校の門から少しはなれた道に、彦三郎が最近買入れた、クライスラーのクーペが置いてあった。

「僕が、乗って帰るの？」

「はい。これから女子学習院へ回って、麻子さまをお乗せします」

驚きは、その瞬間から、喜びにかわるのであった。しかし、忠彦にとって、大事件にはかわりはない。肥沼は、翌日からのことを保証はしなかったが、忠彦にとっては、今日一日がすべてであった。

クーペの車内は狭い。運転手を入れて五人乗れたが、運転手の真うしろの席は、特別に小さくつくってあった。一度か二度は、忠彦は、その車に乗ったことがあり、その小さな席は、子供用だと自分で考えていた。

自動車は、何なく権田原の坂をのぼり、神宮外苑にはいり、女子学習院の正門の前についた。麻子の方が勉強が多いから、忠彦は、車の中で、かなり待った。しかし、門から出て来る女子学習院のセーラー服の子供たちを見ていると、退屈はしなかった。

忠彦が、これほど大勢のセーラー服の少女を見たのは、そのときがはじめてであった。女中たちは和服であったし、電車の中にいた女たちは、それぞれ勝手な、色彩もまちまちな、地味な和服で、洋服の女は全く見ることが出来なかった。とくに町方の女達は、例外なく和服であった。

町方の女の洋装姿を見たと思えば、スカートは、ほとんど足首までの長さがあり、脚というものは全く見えなかった。忠彦は、姉の麻子の日常を知っていたから、その意味では、大して驚きはしなかったが、下校する女子生徒たちは、黒の靴下の膝から下を、おしげもなくあらわし、——それは、美とか、醜とかいうことでなく、明らかに躍動的

であった。それらの群衆に、忠彦は心をふるわせた。

個人の家の抱え運転手というものは、あるじ一家の者に対して、驚くほどの神経を持っていた。麻子が、その仲間たちと、学校の門から出てきたとき、忠彦には姉の姿が見分けられなかったが、忠彦は、その集団の中に麻子がいることを、肥沼が自動車のエンジンをかけたことによって始めて知ったのであった。麻子は、まっすぐに、車の方へ歩いてきた。大きなかばんであった。忠彦のランドセルより大きい。勉強がたいへんなのだな、と忠彦はそのとき思った。

忠彦と麻子は二つ違いであった。麻子は、どちらかというと父親似で、丈夫であり、忠彦は逆に母親の正子に似て、病身というほどではないが、腺病質であった。幼い頃の二つ違いといえ、いろいろな点で、それほど格差はない。松浦家では、二人の子供を、ひとまとめにして育てた。二人の食事時間は、——学校へ行くようになってから、その習慣は崩れたが、大人たちより一時間早くすまされた。そういう日常の責任は、正子ではなく、竹と、二人の若い女中の責任なのであった。麻子も、忠彦も、はじめから別々の部屋を与えられていた。忠彦のは、中奥の仏間で、麻子

は、その隣であった。仏間といっても、それは、かつてそこが仏間であったから、そう呼びならわされていたので、普通の六畳程の部屋であった。北向きで、一日中太陽はささない。虐待といえただろうか。小さな勉強机と本箱が置かれていただけである。

麻子の方も大した差はない。麻子は女だから、同じ北側の部屋でも、いくらかにぎやかな色彩があったといえるかも知れない。

勉強について、二人の子供の手助けをしていたのは、二人の書生であった。しかし、それは、家庭教師という風なものではない。わからないところがあると、書生に与えられている表の部屋に、行くのであった。麻子は、女であったが、子供なので「表」へ行くことを許されていたのだ。

麻子と忠彦は、一緒に遊ぶということはなかった。食事の時に顔を合わせるだけであった。二人は、その頃から、別々の生活を持っていた。だから、殆んど共通の話題がない。

一緒に肥沼の自動車で浅草まで帰ったときも、車の中で、話をしなかった。お互いにきらっていたのでもない。ただ、大人の生活と区別されている、ということ、いくらか連

帯感のようなものが、麻子と忠彦の間にあっただけに過ぎない。

車の中で、麻子は本を読んでおり、忠彦は、その長い道中、街を見たり、肥沼の手脚の動きや、自動車というものの見えている限りの構造に興味を持って眺めた。

その日、麻子と忠彦が、橋場の邸へ帰ったとき、少しばかりの変化が、家の中に起こっていた。珍しく、正子を中心に、竹や、若い女中達が、茶の間に集まっていた。そういうことは今までになかった。二人がはいって行くと、女たちは、二人のために席をあげた。

テーブルの上に、変なものが置いてあった。褐色に塗られた四角い箱であった。

「なに、これ？」と麻子が最初にきいた。

「御挨拶あそばせ」と竹が、少しきびしい顔をしていった。

「あ、忘れちゃった。ただいま」

忠彦は頭をさげただけであった。

「なによ、これ、お母さま」

「ラジオっていうの」

「何をするもの？」

正子は、その奇妙な箱から出ている一本の線の先につい

ている、電話の受話器のようなものを、麻子の耳にあてた。麻子は、不思議そうな顔をした。

「僕にも貸して」

と忠彦はいった。

麻子はなかなか、それを弟に渡そうとしなかったが、次第に面白くなかったような顔をして、忠彦に渡した。忠彦は、びっくりした。その線の中から、突然奇妙な男の声がかんこえてきたのであった。電話とは違った。話、ではなかった。その声は、へんにしわがれていて、その癖、一種の音楽的な抑揚があった。

「なに、これ？」と忠彦はきいた。

「ナニワブシ、っていうものよ」と正子が、少し笑いながらいった。

「あたしも、はじめてきいた」

「この声、何処から聞こえて来るの？」

「ついこの間、芝の愛宕山というところに、ラジオの放送局が出来たのよ。そこで、この人が、うなっているの」

「どうして聞こえるの？」

「電話と同じ理屈でしょう。でも、これは、電話のように、線をつたわって来るのじゃなくて、無線という電気の波な

のよ。それを、この器械が受けて再生しているの」

「へえ」

と忠彦は、口をあけた。

その顔が面白いといって、若い女中たちが笑い出した。麻子と忠彦が帰って来るまでに、女中たちもみんな聞いていたに違いなかった。

正確にいえば、それは、大正十四年の七月十二日に放送が開始されている。松浦彦三郎がラジオを買い入れたのは、その年の秋であった。

そのラジオは一度に一人しか聞くことが出来なかった。それで、大人も子供も、その日はお祭りのようなさわぎに暮れた。

忠彦の古い記憶の中で、ひときわ鮮明に残ったのは、ラジオと、更にもう一つの事件であった。その二つのことは、互いに連絡し合って、一つを思い出すと、必ずもう一つも思い出す、という風になった。

ラジオをきいてから、幾日過ぎたろうか。夜半に、突然家の中があわただしくなり、忠彦は目を醒ました。北側の部屋であつたせいもあるが、多分、もうそれは冬の近い季節であつた。蒲団から起上がると、寒さを感じたので、

忠彦は、そばにあつた学校の上衣を、寝衣の上から着た。

何が起こつたか、わからなかった。暗闇の中に佇むと、畳廊下を、人の走る音が聞こえた。地震でも、火事でもなかった証拠に、誰も忠彦を起こしにこなかった。

忠彦は、えたいの知れない恐怖を感じはじめていた。廊下に出るのがこわかつたので、庭に面している板廊下に出て、隣の麻子の部屋へ行つてみた。麻子の部屋には暗い電灯がついていたが、麻子はいなかった。さっきまで麻子が寝ていたと思われる赤い蒲団が、はねのけられて乱れていた。やっぱりそこから廊下に出なければならなかった。

猫のように、用心深く、忠彦は襖を少しひらいた。そのときは、誰も廊下にはいなかった。その畳廊下を左へ少し行くと、右側に茶の間があるので、忠彦は急いで廊下を横切つた。茶の間にも、誰もいない。誰もいない部屋には、何事も起こっていない、ということをも、忠彦は感じていたので、そこに一人でしばらくいた。それから間もなく、全く知らない男の音が、畳廊下を表の方へ消えた。足音の幾つかがそれに続いた。そして静寂がきた。

突然に、台所や女中部屋に通じる襖が開かれたとき、忠彦は声をあげた。襖をあけたのは、若い女中の忍しのぶであつた。